

気付けば見知らぬ土地にいた。

相棒であるツバキと共に飛ばされたそこは、何の因果か、惑星ゼヘナから遠く離れた地球だった。

そこで私達は現地の少女と出会った。

名は流遠るしおやみひめ。

彼女の名を聞いた時、私は不思議な感覚に陥おちった。まるで古い知人と再会したような懐かしさを感じた。無論、私の記憶装置メモリにそんな名前は記録されていない。

だが、私はMBコアの再起動の際に、自分自身の過去に関する記憶を失っている。もしかしたら、『やみひめ』という名の知人がいたのかもしれない。今となっては確かめようもない事だが。

紆余曲折の末、やみひめの協力のおかげで私達は生きながらえた。私達と共に飛ばされてきたのであろう〈カタストロ〉と相見えあいまみ、しかし〈機獣少女〉として充分に戦えないツバキに代わって、やみひめが戦ってくれたからだ。

あくまで緊急措置としての仮契約だったが、戦う力を残していない我々を見かねたやみひめは、引き続きの協力を申し出てくれた。平和な国で生まれ育った普通の少女にすぎない彼女が、何故そこなにゆえまでしてくれるのか。

無知であるが故の好奇心かもしれない。  
愚直であるが故の優しさかもしれない。

どちらにせよ、やみひめにとっては危険だ。彼女のためを思うなら、断るべきだった。

しかし、私達に選択肢はなかった。私達自身のため、延ひいては地球のため、〈カタストロ〉は殲滅しなくてはならない。

あれは災厄なのだから。

そのためであれば、なりふり構ってはいられない。〈カタストロ〉を殲滅するため、〈機獣少女〉を支援する。

それがMBデバイスである私の存在意義なのだから。

サイドストーリー #03

『MBデバイスは機獣だった頃の夢を見るか?』

私とツバキが地球に飛ばされてから三日目の夜。あと一時間もすれば日付が変わり、四日目になろうとしていた。

ツバキとやみひめが同じベッドに入り、消灯してから数分が経つ。二人はすでに寝息を立てている。

待機モードの私は枕元の目覚まし時計などと共に置かれており、彼女等の寝顔を見下ろす事が出来る。普通の少女であろうやみひめはもちろん、普段は大人びた雰囲気の子バキも、歳相応のあどけない表情を浮かべている。

緊急事態に備え、MBデバイスである私は常にツバキの傍そばにある。彼女の寝顔も飽きるほどに見ている。だが、このように穏やかな表情で眠りに就ついているツバキを見るのは初めてかもしれない。それは隣で眠っているやみひめの存在によるものなのか。

思えば、ツバキと《機獣少女》の契約を結んでから、彼女が誰かと同室で眠るのは初めてだ。《機獣少女》の仕事は命の危険を伴い、それに見合う待遇が保障されている。一人暮らしには広すぎる個室を与えられ、同居人はなく、友人を泊める事もなかった。ツバキがそれを孤独だと感じている節はなく、私もそれが当たり前なのだろうと思っていた。

『――』

だが、今こうしてやみひめと眠っているツバキを見て、それが間違いだった事に気付いた。どれだけ達観していようと、どれだけ大人びていようと、ツバキは小学五年生の少女だ。独りで平気な訳がない。平気なのだと思えば、それは孤独に慣れてしまい、心が麻痺しているだけだ。

不測の事態だが、同年代の友人と暮らす機会を得られた事は僥ぎょう倖こうかもしれない。樂觀視出来る状況ではないが、《カタストロ》には痛手を与えた。しばらくは満足に活動は出来まい。束の間でいい、ツバキには普通の少女としての時間を過ごしてほしいと思う。

私もそろそろ自己診断状態スリープ・モードに入るとしよう。いざという時に不具合を起す訳にはいかない。

もう一度、少女達の寝顔を眺める。すると、寝返りを打ったツバキの額ひたいが、やみひめの左肩に密着した。その様子は姉に甘える妹のようで、微笑ましく思う。

この光景をずっと見ていたい衝動に駆られたが、そういう訳にもいかない。MBデバイスに休息は必要ないが、機能更新アップデートなどを行わなければならないからだ。諸々の更新作業と情報の整理。人間もまた、睡眠中に似たような事を行っていると聞く。だから、これも一種の『眠り』なのだろう。

そんなどうでもいい事を思いつつ、私も眠る事にした。

銀河の彼方かなたにある惑星ゼーナ。そこには優れた戦闘能力を持った金属生命体——『機獣』が存在した。機獣は自ら戦う意思を持ち、ゼーナにおける戦いにおいて、最強兵器として君臨していた。

ゼーナの歴史は戦争の歴史だ。有史以来、常にどこかで戦争があり、そこには機獣の姿があった。人間は機獣を戦闘機械獣とし、武装を施し、操縦席を設けた。それは機獣が自由を奪われた事を意味するが、より強い戦闘能力を得たのも事実だ。だから機獣は人間を受け入れた。自分達の力を最大限に引き出してくれる搭乗者あそびを主とした。

ゼーナの歴史は戦争の歴史であり、人間と機獣の共存の歴史でもあるのだ。

人間と機獣は互いに寄り添い、戦場を、文明を、時代を、そして歴史を紡つむいできた。この関係が未来永劫に渡って続くと誰もが考えていた。無論、機獣もだ。

しかし——人間と機獣の蜜月は唐突に終わりを迎えた。

何がきっかけだったのかは判らないが、恒常的に戦争が起きていた惑星ゼーナから、戦争がなくなったのだ。正確を期すなら、人間から闘争本能が失われた。それは戦争の終わりを意味していた。

人間にとって戦争は政治の一部だと言う。経済活動の一環だと言う者もいる。確かにそういう側面もあるのだろう。しかし、それは知性を持つ人間の大義名分だ。武力を使うための口実だ。人間にも闘争本能があるのだから、戦いたいという欲求を持つのは当然なのだ。高度な知性を持つが故の矜持きょうじが本能で戦う事を認めたがらないのだろう。

だが、そんな事はどうでもいい。重要なのは、人間が戦いを望まなくなった事だ。

戦いのない世界に兵器は必要ない。自衛のための備えも、抑止力としての武力も要らない。誰もが戦う意思を失っていたのだから。

そんな世界に機獣の居場所はない。

我々は無用の長物とされた。

しかし、人間の中にも我々との共存の道を模索する者達がいた。彼等は我々に、新たな発電システムである「ジェネレーター」のコアとなる事を提案した。

『強要』ではなく『提案』だ。

機獣となった時点で、我々に自由意志はない。勝手に機体からMBコアを引き抜き、「ジェネレーター」に組み込めばいい。しかし、人間はそれをしなかった。我々から機体からだの自

由を奪い、戦う自由すら奪ったが、選択する自由までは奪わなかった。

それを人間なりの誠意と受け取った多くの機獣が、〈ジェネレーター〉となる事を受け入れた。このまま漫然と朽ちてゆくくらいなら、不本意であつても人間と共に在りたいと願った結果だつたのだろう。

そして、それを拒んだ機獣にも人間は妥協案を提示した。いつか機獣の存在が再び必要とされる時まで、MBコアの状態で休眠施設にて眠りに就くというものだ。

〈ジェネレーター〉となる事を拒んだ機獣の多くが、これを受け入れた。恐らく、私もそうだつたのだろう。断言が出来ないのは、私が自分自身に関する記憶を失っているからだ。私がどんな機獣だつたのか、どんな搭乗者が主だつたのか、まるで思い出せない。それを悲しいとは思わない。思っていないはずだつた。

しかし――

――『だけど、そんなのって、悲しいよ……!』

私の言葉を聞いたやみひめは、そう言って泣いていた。あれは私の代わりに泣いてくれたのだろうか。悲しいはずなのに、涙を流せない私のために……。



』

おかしい。自己診断状態スリープ・モードに入れない。

人間風に言うなら『眠れない』

正確に言うなら、非常に眠りが浅かった。意識は眠っているのに、脳は活動を続けている――いわゆるレム睡眠に近いのかもしれない。

今の私はMBデバイスで、機能停止シャットダウンすれば自動的に自己診断状態スリープ・モードに入れるはずなのだが、時刻を確認すると、すでに日付が変わっていた。消灯してから、小一時間は経った事になる。

どうしたというのだろうか。何か機能に不具合が生じているのだろうか。

「――〈カグツチ〉?」

夜の静寂しじまに、控えめな少女の声が混じつた。

『やみひめ、まだ起きていたのか?』

「ううん、急に目が覚めたの。そしたら、〈カグツチ〉が起きてる気がしたから」

『そうか。いや、おかしな話だが、上手く眠れぬのだ。こんな事は普段はないのだがな』

やみひめが、どうして私が起動したままだと思ったのかは判らぬが、本人にも判らぬだろう。だから、私は何気ない風を装って答えた。

「今の〈カグツチ〉はMBデバイスに組み込まれた欠片で、本体は機獣のコアなんだよね?」

『ん、そうだ』

「機獣も夢を見るの?」

『どうだろうな。再起動して以来、夢を見た覚えはない。それ以前の事は覚えておらぬが、見ていたのかもしれない。機獣もまた、生き物だからな』

私はMBコアの再起動の際のトラブルで、記憶装置のデータの一部を失っている。一般常識の類は覚えていたが、自分自身の情報がない。名前すら思い出せない。

〈カグツチ〉というのは断片的に覚えていた単語で、それが何を意味するのかまでは覚えていない。しかし、過去の私を構成していた一部だと思った。だから私は、これを自分の名前にする事に決めた。

「……………」

気付けば、私の答えを聞いたやみひめが複雑な面持ちでこちらを見ていた。記憶がないと言った事を気にしているのかもしれない。

『やみひめよ、其方は気にしすぎだ。記憶の欠如について、私が気にしておらぬのだから、其方も気にする必要はない』

「う、うん……………」

やみひめは明らかに納得出来ない様子だが、それでも頷いて見せた。私の境遇に無意識に涙を流すような少女だ。他者の心の痛みが判るのだろう。それでいて、自分の考えを押し付けるような事もしない。だから、私の記憶の欠如に関して、これ以上の言及もしてこない。

やはり、この少女は本質的に優しいのだろう。

だから、ツバキも心を開いているのだろう。

そして、私もこの少女に惹かれているのだと思う。

他者を気遣える優しさと、他者を護るために戦える勇気を持っている、年端もいかぬ戦乙女——それが〈機獣少女〉だから。

『——時に、何故、機獣も夢を見ると思ったのだ?』

この質問自体に深い意味はない。好奇心もあったが、会話というのはキャッチボールだ。

気になる情報があれば、そこから次の話題に転換し、それを繰り返す。主に雑談の手法だが、自分からはあまり会話を振ってこないツバキと付き合いうちに有効だと知った。

「うん……別に理由はないんだ。ただ、並行世界の話をした時に、〈カグツチ〉が言った言葉が引つかかって。覚えてる？」

『ふむ。自分の発言はすべて記憶しておるが、どれが其方そなたの中で引つかかったのかは、悪いが見当がつかぬ。何か気に障るような事を言っただろうか』

「うん、そんな事は言っていないよ。ただ気になっただけ。あのね、『私とアサトが同じ歳で、仲良く並んでる世界もあるかもしれない』って言ったでしょ？」

『確かに言ったな』

「並行世界っていうのは『可能性の世界』で、それって夢みたいなものでしょ？ もし、ここが並行世界なら、これは誰かが見てる夢なんじゃないかって」

ずいぶんと乱暴な理論だが、これは学会の議論ではなく雑談だ。私とて専門家ではない。ならば、やみひめの考えに乗ろう。

『古い説話だな。たしか、『胡蝶の夢』だったか』

ある男が蝶になって飛んでいる夢を見た。しかし、夢から覚めた男は疑問を持った。蝶になったのは夢ではなく、蝶こそが本当の自分で、今の自分は蝶が見ている夢ではないのか。

そんな話だったはずだ。ちなみにこの話で言いたかったのは『どちらが現実かは問題ではなく、どちらであっても受け入れればいい。転じて、どちらでもいい事だ』とか、そんな内容だったと思う。

まったくもって、人間というのは面白い発想をする生き物だ。

「並行世界が本当にあるかどうかは判らないけど、夢でならありえない事も可能になるよね。だから、アサトの事を好きな別の私が、こうなりたいって願ったのがこの世界で、別の私はそれを夢で見てるんじゃないかって」

『なるほどな。しかし、好きならば私が言ったように、同じ歳の恋人同士にすればよいのではないか？』

夢とは願望だ。そこに描くのは理想であるべきだろう。

「きつと、夢でも恥ずかしいんだよ。だから、こんな微妙な歳の差にしたんじゃないかな」仮定の話だが、やみひめの言う『別の私』というのもまた、やみひめに相違ない。それを理解しているためか、やみひめの脈拍や呼吸にわずかな緊張が見られる。照れているのだろう。消灯しているため見えないが、恐らく、顔を赤くしているはずだ。

『ふむ。面白い考えた。もしそうであるなら、『この世界を夢として見ているやみひめ』は、

『どのような娘なのだろうか?』

今よりも成長しているのか。もう成人しているのか。結婚して母親になっているかもしれない。もしくは、すでに老婆になっているかもしれない。実は男性の可能性もある。

そう、可能性だ。それは無限に存在する。

だが、やみひめの口にした可能性は、私の発想にはないものだった。

「——もしかしたら、機獣かもしれないよ?」

その言葉を聞いて、私の中で何かが反応した。MBデバイスの身には存在しないはずの、鼓動の高まりを感じた。

そんな事がありうるのだろうか?

機獣が人間の少女になって、人間の少年に恋をする——そんな願望を抱くのか?

「ふわあ……眠くなってきちゃった。そろそろ寝るね」

やみひめは私の変化に気付いていないようで、欠伸あくびをしながら、眠たげな声で言った。

『そ、そうか……うむ、私もそうしよう』

「うん。おやすみ、へカグツチ」

『ああ。おやすみ、やみひめ』

一分と待たずに、やみひめの寝息が聞こえてくる。話をしていたためか、不思議な充足感がある。すぐにでも自己診断状態スリープ・モードに入れるだろう。深く考える必要はない。すべて他愛のない雑談なのだから。

機獣も夢を見るのか、それは今の私には判らない。

だが、もし可能であるのなら、今宵こよひは良い夢が見られるかもしれない。

そんな事を思いながら眠りに就くのは初めてだ。

出来れば、機獣だった頃の夢がいい。

顔も名前も思い出せない主に逢いたい。

夢であれば可能はずだから。

END



## あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』の番外編 サイドストーリー#03をお届け致します。

今回は〈機獣少女〉のMBデバイスである〈カグツチ〉視点のお話でした。ここまで二話毎に番外編を挟んでいるので、今回も挟みました。ページ数が少ないですが、前回の#02が例外で、本来、番外編はこのくらいの気持ちでした。

内容に関しては、すでに開示されている情報もありますが、視点が違えば捉え方も違うという事と、自分達の境遇を機獣である〈カグツチ〉はこう受け止めているという事を感じていただければと思います。

さて、今回のサブタイトルは有名SF『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』のパロですが、映画版『ブレードランナー』は観たものの、原作小説は未読です。第一話の〈カグツチ〉の台詞で『たった一つの冴えたやり方』という言葉を使ったり、並行世界などのSF用語を好んで使ったりしますが——僕は古典SFの類たぐいは読んだ事がありません。不勉強で申し訳ない限りです。

ただ、『幼年期の終わり』とか『夏への扉』など、古典SFは心惹かれるタイトルが多いです。読んでみたいと思うものの、時間がね……。

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとございます。思わせぶりなシーンが多いですが、今は掲載していない僕の過去作品を知っている方は、すでにオチは読めているかと思います。恐らく正解です。どんでん返しとかはありません。

それでは、次は本編・第六話でお会いしたい——ところですが、二月はバレンタインがあるんですよ……。なので、場合によっては三月になる可能性があります。すべては僕のがんばり次第ですが、しんどいのは嫌なので、あまり期待はしないでください。

……まあ、バレンタインの話を書かずに『ソイヤミ』を優先する可能性も無きにしても非あら

ずですが。

刮目しないで結果をお待ちください。

2015 / 1 / 27  
流遠亜沙

[アンケートに答える](#)

[『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る](#)